

司法

Jailhouse Jam-Up

人口過密に悩む塙の中

犯罪の増加で日本の刑務所はどこもすし詰め
収容者間の摩擦も増えて、塙の内外の改革が急務に

高山秀子（和歌山）

ペールグリーンの高い屋根がそびえ、入り口にクスノキのレリーフが施された和歌山刑務所（女子受刑者施設）は、外からはまるでモダンな公立図書館カリゾートホテルのように見える。

所内の廊下にはちり一つなく、中庭では受刑者が整然と洗濯物を干している。大食堂では栄養を考慮した食事が出され、タイル張りの清潔な風呂場の入り口には「レディース・スパ」と書かれた赤いのれんがかかっている。

94年から進められてきた改修工事は、昨年12月に終了した。だが、大きな問題が一つ残っている。収容定員を500人にしたことだ。日本政府は、わずか数年で刑務所がこれほどの過密状態になるとは予想していなかった。

いま和歌山刑務所には640人が収容されている。記者が訪れたとき、受刑者は夕食を終えて居室に戻り、布団を敷きはじめていた。整理整頓が行き届いた3畳ほどの独居房30室が、2人部屋として使われている。6人部屋には8人が、教室を雑居房に改装した部屋には16人が寝起きしていた。布団を敷くと、足の踏み場はまったくない。

狭い空間がけんかを招く

午後7時には二つのテレビ番組が放映された。コメディ番組と中国映画『山の郵便配達』だ。ある2人部屋では、若い女性がテレビを見ている横で、中年の女性がシドニー・シェルダンの小説を読みふけていた。

6人部屋に収容されている8人のうち、若い女性は「私はいびきもかくし、歯ぎしりもする。自分は寝てしまえばわからないけれど、他の人たちが気の毒」と言う。

「摩擦が起きないように、2人部屋の人選には気をつけている」と、向井洋子首席矯正処遇官は語る。看守長の一人は「受刑者の間で口論やけんかが増えている」と、過剰収容から起きる受刑者のいらだちを懸念する。

過剰収容は和歌山刑務所に限った話ではない。今や、日本全体の刑務所が過密状態になっている。

2001年には35年ぶりに6万5000人の定員を超え、その後も収容者は増え続けている。日本最大の府中刑務所の定員は2598人だが、現在の収容者数は2980人。定員1200人の横浜刑務所には、1469人が収容されている。刑務所や拘置所は全国に189施設あるが、既決囚の収容率は118.5%。2005年には収容者数が8万人を超える見込みだという。

定員オーバーの背景にあるのが、長引く不況に伴う犯罪の増加だ。昨年度の犯罪認知件数は、10年前の約170万件から約285万件に増加。このうち殺人、強盗などの重要犯罪は2万件を超え、10年前から倍増している。

「日本の安全神話はとっくに過去のものとなったことに、肝心の日本人が気がついていない」と、犯罪問題に詳しいジャーナリストの久保博司は言う。「警察の士気が低下し、解決できない事件も増えてきた。このままではアメリカより危険な国になるかもしれない」

カラオケでストレス解消

政府は今年、過去20年間で初めて刑務所の新設・増設に約300億円の予算を計上したが、過剰収容はすぐには解決しない。過密状態におかれた受刑者のストレスを緩和しようと、各刑務所はそれぞれ工夫を試み、二段ベッドを取り入れたり、カラオケ大会を開いたりしている。

和歌山刑務所では若い女性刑務官のアイデアで、運動の時間に場所を取らないサンバを踊らせている。サンバなら、雨の日でも講堂で踊れるという利点もある。紀州の手まりを歌った童謡「まりと殿様」をロックンロール風にアレンジして踊らせることも検討しているという。

過剰収容のほかにも、名古屋刑務所などで起きた受刑者の人権侵害も大きな問題となっている。犯罪の増加と刑務所内の問題をかかえ、日本は塀の中も外も、改革を迫られている。

ニューズウィーク日本版

2003年5月21日号 P.57